

実習における保育学生の感情管理方略に関する研究

上山瑠津子・池田明子・松尾浩一郎（福山市立大学教育学部）

問題と目的

近年、看護師、教師、保育者等の対人援助職の特質について感情労働の観点から検討されている。感情労働とは、Hochschild (1983) が提唱した概念で、「相手の適切な感情を引き起こすために自らの感情をコントロールし、外見や表情を適切に維持することが求められる労働」と定義される。教育実践の状況に応じた感情管理（表出や抑制）は、子どもの学校生活における望ましい社会的行動を喚起する教師の援助方略と位置付けられている（伊佐，2009；木村，2015）。保育者・教師の感情管理を方略として捉えることにより、養成教育において学習し、育成可能な資質能力として検討できると考えられる。

保育学生の感情管理に関しては、実習を通して対象や状況に合わせて適切に態度や感情を表出したり、時に抑制したりすることを学んでいくことが示されている（上月，2011；高橋，2012）。しかし、これらの先行研究では、事例数が少なく、また実習中に経験する様々な感情（嬉しさや不安など）に関する具体的な管理方略が明らかにされていない。そこで、本研究は、保育学生が実習を通して子どもや保育者に対して、喜びや嬉しさなどのポジティブ感情、怒りや不安などのネガティブ感情をどのように管理（表出や抑制）するのかについて明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者 保育所実習および幼稚園教育実習に参加した保育学生 101 名のうち、回答の得られた 64 名（回収率 63.3%，女性 63 名，男性 1 名，平均年齢 20.50 歳， $SD = 0.51$ ）のうち、を分析対象とした。

調査時期と手続き 20XX 年 8 月から 10 月上旬、各実習事後指導終了後に、Microsoft Forms を利用した自由記述式の質問紙調査用を実施した。

調査内容 実習中の感情表出や抑制に関する質問として、子どもと保育者それぞれに対して、実習生として喜びや嬉しさなどのポジティブ感情を表出するとき、怒りや不安などのネガティブ感情を表出するときに意識したことを尋ねた。加えて、保育者志望度（4 件法で「全くなりたくない」から「非常になりたい」）について尋ねた。

調査実施に際して、口頭と文書で調査趣旨、調査内容を説明し、研究協力の同意を得た。回答は匿名で求められ、回答の有無は成績等の評価に関係しないことを説明した。

分析方法 自由記述の内容をテキストマイニングソフト・KHCoder (Ver.3) を用いて分析し、子どもと保育者に対する感情管理方略の特徴を検討した。

結果と考察

1. 「子ども」に対する感情管理 テキストデータから 4173 語が抽出され、そのうち 1692 語を分析に用いた。品詞別の頻出語では、「声 (49)」「トーン (38)」「笑顔 (22)」「目 (15)」「ジェスチャー (9)」などが多く出現し、非言語的なアプローチにかかわる語が多かった。また、動詞では「伝える (63)」と「伝わる (32)」が多く出現し、一方的に自分の感情を伝えるだけでなく、感情の受け手の子どもに伝えたい感情が伝わることを意識していることが読み取れ

た。共起ネットワークのサブグラフの分類から、子どもに対して、「表情や声のトーンを変える」「手やハイタッチなど身体的な動きで表出する」「言葉で伝える」「ネガティブ感情の理由を具体的に伝える」「目を見て伝える」「不安や緊張を抑える」といった感情管理方略を用いていることが読み取れた。

2. 「保育者」に対する感情管理 テキストデータから 2477 語が抽出され、そのうち 945 語を分析に用いた。品詞別の頻出語では、「エピソード (18)」「言葉 (14)」「伝える (65)」が頻出し、言語的アプローチにかかわる語が多かった。また、「不安 (39)」も多く出現し、実習生としてのネガティブ感情を伝えることを意識していたことがうかがえる。共起ネットワークのサブグラフの分類から、保育者に対しては、「具体的なエピソードを伝える」「言葉や表情を意識して感情を伝える」「感謝や喜びを素直に伝える」「子どもの姿に対する感情を保育者と共有する」「不安なことは相談、質問する」といった感情管理方略を用いていることが読み取れた。

3. 保育者志望度による特徴語の違い 保育者志望度の回答のうち「非常になりたい」「できればならない」の回答者を志望度高群 (49 名, 76.6%)、「あまりなりたくない」「できればなりたくない」の回答者を志望度低群 (15 名, 23.4%) として、群別の共起ネットワークから感情管理の特徴語を捉えた。

まず、子どもへの感情管理では、志望度高群は「表現」や「喜ぶ」が特徴語として示され、子どもを抱きしめ、身体全体で表現すること、子どもと一緒に喜んでいることが伝わるようにすることが記述され、ポジティブ感情の表出を積極的に行っていることが読み取れた。一方、志望度低群は、「不安」や「緊張」が特徴語として示され、不安や緊張がなるべく伝わらないように抑えたといった、ネガティブ感情の抑制を意識していることが読み取れた。

次に、保育者への感情管理では、志望度高群は「素直」や「エピソード」が特徴語として示され、喜びや嬉しさ、不安な気持ちを言葉にして素直に伝えること、嬉しかったことも困ったことも積極的にエピソードを交えて伝えることが記述された。一方、志望度低群は、「質問」や「相談」が特徴語として示され、不安に感じたことは質問すること、不安なところは見せないよう園の先生に相談しながら自分でコントロールすることなどが記述されていた。このことから、志望度低群は、高群に比べ実習生としての立場を意識して実習中の緊張度が強かった可能性がうかがえた。

今後の課題

第 1 に対象児の発達年齢を分けて検討したが、子どもの年齢によって、保育者の言語的な関わりや働きかけは異なることから、発達年齢に応じた検討が必要である。第 2 に、養成校教育において、保育学生の感情管理方略をどのように身につけていくのか、具体的な指導法などを検討していく。